

# ミリンダパンハーの構成と成立に関する一考察

玉 井 威

(一)

ミリンダパンハー (Milindapañhā または Milindapañho) は、紀元前 2 世紀後半、西北インドを支配していたギリシャ王メナンドロス Menandros (インド名 Milinda) と仏教僧ナーガセーナ (Nāgasena) 長老との間で、仏教教理に関して問答が交わされたとされ、これが後に 1 冊の聖典の形にまとめられたものである。今日、パーリ語で伝えられている本書には、本書成立当時、教団内で問題となっていたと考えられる様々なテーマが扱われているが、それらはミリンダ王が問を發し、ナーガセーナ長老がそれに答えるというように、一種のカテキズム (教義問答) の形で展開せられている。

以下の所論は、主としてトレンクナーによる校訂本 (以下トレンクナー本と呼ぶ) とタイ王室版 (以下シャム本)、及び本書の註釈書であるミリンダ・ティーカー (Milinda-Tikā 以下ティーカー) の 3 本間における問の数の異同を検討し、この点から本書の構成と成立の問題について、若干の考察を試みるものである。

(二)

まず、トレクナー本の目次によって本書の構成を見てみると、次の如くである。

- |                                |                         |
|--------------------------------|-------------------------|
| (1) Bāhirakathā                | (pp. 1 ~24)             |
| (2) Lakkhaṇapañho              | (pp.25~50) Vagga I-II   |
| (3) Nāgasena-Milindarāja-pañhā | (pp.50~64) Vagga III    |
| (4) Vimaticchedana-pāñho       | (pp.65~89) Vagga IV-VII |
| (5) Meṇḍakapañho               | (pp.90~362) Vagga I-IX  |
| (6) Anumānapañho               | (pp.329~347)            |
| (7) Opammakathāpañho           | (pp.363~419) Vagga I-VI |
| (8) 結語                         | (pp.419~420)            |

この分類は本書自身 (p.2) に説かれている分類にほぼ一致するものである。それによれば、次の如くである。

I. Pubbayoga

II. Milindapañha — Lakkhaṇapañha  
                          └ Vimaticchedanapañha

III. Lakkhaṇapañha

IV. Meṇḍakapañha — Mahāvagga  
                          └ Yogikathāpañha

V. Anumānapañha

VI. Opammakathāpañha.

さて、前者の分類中、(1)のBāhirakathā<sup>1</sup> (外語) は所謂「序話」にあたる所で、ミリンダ王とナーガセーナの2人の前生物語が、ここで説かれて

いる。後者の分類で言えば、Ⅰの Pubbayoga に相当する。次の(2) Lakkhaṇapañha (相の間) からが本論に入る訳である。(2)は2章 (Vagga I – II)<sup>2</sup> に亘っているが、この部分が Lakkhaṇapañha であるとのタイトルが、これに付せられている訳ではない。これら2章中 (厳密に言えば第2章に)、3分の1程が相に関する問にあてられているのと、後者の分類中、Ⅱに Lakkhaṇapañha があるのに基づいて、この様に命名されたものと考えられる。しかし、後述するように、相の間はこの部分だけにある訳ではない。次の(3) Nāgasena–Milindarāja–pañhā は、第3章がこれにあてられているが、正確に言えば、この第3章には含まれない2問が、最後に付加されて、「ナーガセーナとミリンダ王の間が終った」(Nāgasena–Milindarāja–pañhā nīṭṭhitā) の語をもって(3)が終っている<sup>3</sup>。この部分のタイトルは、この結語から来ていると考えられるが、必ずしも(3)にのみ限定して付せられたものではなく、(2)と(3)の部分の総称とも考えられる。シャム本にはこの結語はない。後者の分類で言えば、Ⅱと重なる様であるが、(3)にも相に関する問が見られるので、Ⅲの Lakkhaṇapañha とも重なるように思われる。次の(4) Vimaticchedanapañha (断疑問) は第4章から第7章まで4章に亘っている。このタイトルも(4)の部分に実際に付せられている訳ではなく、後者の分類からの借用と考えられる。後者に従えば、相に関する問を除いた全ての問が Vimaticchedanapañha である如くである。以上、(2)から(4)までが、2日間に亘って、2人の間で対論がなされた部分で、合計で7章に分かたれている。(4)の末尾には、やはり結文があって、第3日目ナーガセーナが再び王宮に到り、共に昨夜の回顧を語って、「ミリンダ [王] の間の問答が終った」(Milindapañhānaṃ pucchāvisajjanā samattā) と記して(4)を結んでいる<sup>4</sup>。

ここまでの部分が本書の最古層と考えられており、序話の部分も含めて、

漢訳「那先比丘経」に対応する部分である。しかし漢訳と対応する部分についてみても、それが必ずしも同一時に成立したとは断定できない。(3)の末尾に「ナーガセーナとミリンダ王の間が終わった」と記されていた様に、逐次に成立していったことが想像できるからである。但し、漢訳には、(4)の末尾の言葉と共に、これらに相当する文は見あたらない。シャム本にもこの結語はないが、次の(5)に入る前に、別問を1問設けている。

次の(5) *Meṇḍakapañha* は、文字通りには「羊に関する問」であるが、意味するところは「難問」とか「矛盾問」と言われる部分である。何故にこの様に言われたかと言えば、トレンクナーによると、これは *Ummagga-Jātaka* (J. vi. 353-55) の一部を構成している羊についての物語のことを言っているから、この様に名づけられたという<sup>5</sup>。即ち、その物語は、菩薩を除いて、誰にも答えられないほどの難しい問の形で、語られているからである。Miln. 本文中に (p.95, etc.) *ubhatokotiko pañho*<sup>6</sup> (両刃の間) とも言われているように、この「難問」<sup>7</sup> は、全く相矛盾すると思われるような2つの事柄を持ち出して来て、そのジレンマを衝き、解答を迫るという形式で進められている。この部分は全部で9章に分けられており、その最初の部分 (pp.90-95) に序に相当する文が付せられている。次の(6) *Amumānapañha* は「推理問」で、トレンクナー本では「難問」中であって、別章の扱いを受けている。そして「難問」第9章として、「頭陀支の間」が1問だけあって、そこでもって「難問は終わった」(*Meṇḍakapañho samatto*) としているが、しかし、その間には難問は含まれず、実際は、第8章までが「難問」である。シャム本では、「難問」第9章では、9問からなっており、その第8が「推理問」であり、第9が「頭陀支の間」となっている。いずれの本も、この2問を「難問」又は「難問」に準ずる扱いをしているが、その理由は不明である。前述の後者の分類では、「推理問」は「難問」

からは独立している。また「難問」は Mahāvagga と Yogikathāpañha の 2 種に分けられているが、この様な名は本文中には見られない。註釈書の Milnṭ (p.40) には, dhutaṅgapañhakathāsāṅkhātayogikathā とあるから, 「頭陀支の問」が Yogikathāpañha<sup>8</sup> であり, 「難問」第 8 章までが Mahāvagga であると見るべきであろう。

(7) Opammakathāpañha は<sup>9</sup>「譬喩問」であるが、このタイトルが、この部分に付せられている訳ではない。後者の分類からの借用であろう。この部分では、最初に内容を示すマーティカー (Mātika 論母) が105列挙せられ、次に第 1 章から第 7 章に亘って、詳述せられるのであるが、前半の 67のみが詳述せられ、残りの38は失われている。最後の(8)は「結び」で、ミリンダ王が対談後、優婆塞となり、そして終には、出家して、阿羅漢のさとりを得たという後日譚が語られ、最後に「ミリンダ [王] とナーガセーナ長老との問答書 (pañhā-veyyākaraṇapakaraṇa) が終わった」と記して、全体を終っている。

### (三)

次に問の数について調べてみることにする。この後日譚に先だって、「結び」で、問の数について次の様な記述がなされている。

以上、22章をもって飾られた 6 部 (kaṇḍa) において、本書に伝えられたミリンダ [王] の問262は終わった。しかしながら、伝えられたものと伝えられないものと全て合わせて、304の間がある。

シャム本にも同様の記述がある。6 部とは先の(2)から(7)までの 6 のことであろう。(I)から(VI)までの 6 とみることも可能であるが、22章という章数は、(2)から(7)までを構成する章数と一致するから、直接的には(2)から(7)までの 6 であろう。しかし、問の数については、実際の間数とはかなり相異

する。今、トレンクナー本と、註釈書であるミリнда・ティーカーと、シャム本に従って、問数表を作ってみると次の如くなる。

	トレンクナー本	ティーカー	シャム本			
(部)	(章) (問数)	(問数)	(問数)			
一部	$\left( \begin{array}{l} 1 \\ 2 \end{array} \right. \begin{array}{l} 15 \\ 9 \end{array} \right)$	$\left. \begin{array}{l} 15 \\ 9 \end{array} \right\}$	$\left. \begin{array}{l} 15 \\ 9 \end{array} \right\}$			
				$\left( \begin{array}{l} 3 \\ 2 \end{array} \right. \begin{array}{l} 14 \\ 2 \end{array} \left. \right\} 85$	$\left. \begin{array}{l} 14 \\ 2 \end{array} \right\} 85$	$\left. \begin{array}{l} 14 \\ 10 \end{array} \right\} 87$
三部	$\left( \begin{array}{l} 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \end{array} \right. \begin{array}{l} 8 \\ 10 \\ 11 \\ 16 \end{array} \left. \right)$	$\left. \begin{array}{l} 8 \\ 10 \\ 11 \\ 16 \end{array} \right\}$	$\left. \begin{array}{l} 10 \\ 10 \\ 11 \\ 18 \end{array} \right\}$			
				$\left( \begin{array}{l} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \\ 8 \end{array} \right. \begin{array}{l} 10 \\ 8 \\ 12 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 12 \end{array} \left. \right\} 84$	$\left. \begin{array}{l} 10 \\ 8 \\ 12 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 12 \end{array} \right\} 84$	$\left. \begin{array}{l} 10 \\ 10 \\ 10 \\ 9 \\ 10 \\ 9 \\ 9 \\ 10 \end{array} \right\} 80$
				$\left( \begin{array}{l} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \\ 8 \end{array} \right. \begin{array}{l} 10 \\ 8 \\ 12 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 12 \end{array} \left. \right)$	$\left. \begin{array}{l} 10 \\ 8 \\ 12 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 10 \\ 12 \end{array} \right\}$	$\left. \begin{array}{l} 10 \\ 10 \\ 10 \\ 9 \\ 10 \\ 9 \\ 9 \\ 10 \end{array} \right\}$
五部	(別章 1)	1				
(四部)	(9 1)	1	9			
	105(マーティカー)	106(マーティカー)	105(マーティカー)			
	( 1 10 )	)	10 )			

六部	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr><td style="padding: 2px 10px;">2</td><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">3</td><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">4</td><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">5</td><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">6</td><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">7</td><td style="padding: 2px 10px;">7</td></tr> </table>	2	10	3	10	4	10	5	10	6	10	7	7	} 67 (38欠)	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">7</td></tr> </table>	10	10	10	10	10	7	} 67 (39欠)	<table style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">10</td></tr> <tr><td style="padding: 2px 10px;">7</td></tr> </table>	10	10	10	10	10	7	} 67 (38欠)
2	10																													
3	10																													
4	10																													
5	10																													
6	10																													
7	7																													
10																														
10																														
10																														
10																														
10																														
7																														
10																														
10																														
10																														
10																														
10																														
7																														
	計236問		計236		計241																									
	(236+38=274)		(236+39=275)		(241+38=279)																									

トレンクナー本では、シャム本やティーカーの様に<sup>10</sup> 各問ごとに問名が付けられていないので、問数は正確には数えられないが、ティーカーに従えば、表の如く236問となる。この236問には、第2部第3章の章外にある「分解の間」(Vibhajjipaṇḥa)と「塩の間」(Loṇapaṇḥa)の2問、それに第3部第7章にある第12「海の間」(Samuddapaṇḥa)と第13「一味の間」(Ekarasapaṇḥa)の2問も含まれているが、これらは、シャム本において、前者をEkabhāgatapaṇḥaとして、後者をSamuddapaṇḥaとして、それぞれ1問にまとめられている様に、内容からすれば各1問とみることも可能であるが<sup>11</sup> 厳密には、ティーカーの言う様に、各々二分すべきであろう。章外の2問について、ティーカーはこれらを「章よりはみ出た」(vaggato atireka)問であるという<sup>12</sup> 何故にこのように言われたのかと言えば、先述の如く、これら2問を以って「ナーガセーナとミリンダ王の間が終った」としているにもかかわらず、第3章はこれら2問の直前で終わっていて、これら2問は第3章には含まれていないからである。いわば第3章に付随した形で、ここに置かれているのである。シャム本では、これら2問は次に続く第4章の第2問となっている。では何故に、この様な形をとったのであろうか。理由は不明であるが、恐らく本書の成立過程と関係があるもの

と思われる。既に、本書の最古層部が漢訳と対応する部分（第3部まで）であり、またそこにおいても逐次に成立していった<sup>13</sup>ことが想像されると述べたが、この場合、この第3章末の結語に注目したからであった。もしこの説に従えば、本書の編纂の段階で、まず第3章までが成り、その際、その編纂から漏れた、或は新たに作られた2問<sup>14</sup>（1問とも見られる）が第3章の章外に、補足問として置かれ、そして最後に結語を置いてひとまず完成したと考えるのである。リス・ディヴッツはこの結語がここにあるのは、“most odd”であると言っている<sup>15</sup>。フィノーによると<sup>16</sup>、第3部（4章－7章）は明らかに、それまでの部分と較べると、内容が劣っており、重複があり、質問の内容も卑俗で、表現も貧弱であると言う。それはともかくとして、フィノーも漢訳とパーリ文の一致する部分を真正（authentique）と見做す主観的判断を避けたいとしている。中村博士は、第3編（部）は第2編に対する追補として、メインドロス王とナーガセーナとの対話のうち第2編に収録し落としたものを集めたのかも知れないと言われる<sup>17</sup>。ともかくも、第3部は第1部・2部よりも、多少遅れて成立したことが想像されるのである。

次にシャム本では、表の如く241問が数えられるが、ほぼ同様の問が2つ重複されているので、実際には2問減らして、239問である。

次にティーカーでは、数えあげると表の如く、総計は236問となるはずであるが、奇妙なことにティーカーは<sup>18</sup>「内話においては、第1日に、88問〔のうち4問〕が答えられ、〔2日目に〕王宮において食事でもてなされてから、〔3日目の〕初更の終りまでの3日間に答えられた問は、88問であった」と述べている。内話（abbhantarakathā）とは外話（bāhirakathā 序話）に対するものであろうが、そこには88問もなく、実際には85問である。更にティーカーは、「外語」のうちにも3問数えており、全部で91



問あるという。「難問」については、表の通り84問あるとしており、最後の2問は「推理問」と「頭陀支問」とである。そこでティーカーは、先の91問とこの84問とを合わせると175問が Milindapañhā-Meṇḍakapañhā があると述べている。<sup>19</sup> 次の「譬喩問」については、ティーカーはマーティカーのことにのみ言及している。即ち、マーティカーは106あるとし、その中で67が答えられ、残り39は広説 (middesa) によっては答えられず、諸経巻において見られるから、そこから理解すべきであるという。<sup>20</sup> マーティカーの総数は、トレンクナー本、シャム本に較べて、1つ多いが、何が多いのかはわからない。そこで総計は、先の175に答えられた67を加えると、242問となるが、実際は表の如く236問である。

#### (四)

以上、3書における問の数を調べてみたが<sup>21</sup>、いずれも、結びで言うところの262問には遠く及ばない。伝えられない問というのも、42ではなくて38か、39であった。何故、この様に現存本と問の数が相違するのか。トレンクナーによれば<sup>22</sup>、このテキスト自体、時代の経過と共に、破損は免れることはなく、あちこちに改変、脱漏、書き込みが見られるという。前述の如く、ミリンダパンハー自身に説かれていた分類が、現存本のそれと一致しないのは、その為であろうが、また彼は、本書の結末の部分はずっと以前に失われてしまっていて、擬似の (spurious) 補足2つが恐らくシャムにおいて、付加されたと言う。少なくとも、シンハリーズの写本では、「シャム国より将来した書物からは、射手の間より終末までの言葉が書かれたと知らるべきである」と書き留めて終っていると言う。このことから言えることは、本書のオリジナルは、現存本とは或る程度相違するものであったであろうし、また現存本間でも相違する点が見られたように、かつては、

いくつかのリセンションが存在したことが想像される<sup>23</sup>。そのことによって、問数にも食い違いが生じてきたものと考えられるのである。

(略号)

トレンクナー本, Miln.=Milindapañho (ed. by V. Trenckner, PTS).

シャム本=タイ王室版 Milindapañho.

Miln T=Milinda-Tīkā (PTS).

M=Majjhimanikāya (PTS).

PTS=Pali Text Society.

PTS Dic=The Pali Text Society's Pali-English Dictionary.

SBE=Sacred Books of the East.

SBB=Sacred Books of the Buddhists.

註

1. Bāhirakathā なる語は、この(1)の最後 (p.24) の結びの言葉に見られる。
2. トレンクナー本の目次に、第1章が Bāhirakathā、第2章が Lakkhaṇapañho となっているが、間違いであろう。Lakkhaṇapañho が2章に亘るのである。Pathamavagga (第1章) の語は Lakkhaṇa- (p.39) 中に見られる。
3. Miln. p.64. シャム本にはこの様な言葉はない。
4. Miln. p.89. シャム本にはこの言葉はないが、その代り、「時に尊者ナーガセーナは僧伽藍に帰った」という一文があって、翌日以降も対談がもたれることを示唆している。
5. Miln. pp.422-3 note.
6. Rhys Davids は a dilemma which has two horns (SBE, pt.1, p.145) と訳し、Horner は a double-pronged question (SBB, Vol.1, p.133) PTS Dic. はこれを questions regarding past and future (s. v. koṭi) と説明しているが、間違いであろう。使用例として、Mi, p.393sq. があげられているが、そこでも Miln. と同様の意味で用いられている。
7. Miln T (p.21) は、難問を「甚深なる結び目(困難、疑惑)の隠されたる問」

(gambhīraṅgaṅṭhi-guyhapaṅṭhā) と註している。

8. Trenckner は Miln. の索引中に, yogikathāpaṅṭhā の語が, 363頁以降に出てく  
るように示しているが (yogin の項), その頁以降では, yoginā yogāvācarena  
という語句が繰り返し使われているのみで, その語句があるところから, ここ  
が yogikathāpaṅṭhā であるように考えたものと思われるが, しかしこの所は「譬  
喩問」に相当する所で, これは誤りである。

9. Miln T (p.40) では, これは Aṅghanakathā と呼ばれている。Miln T (p.43)  
には Upamākaṅṭhā とする。

10. シャム本とティーカーの間名を列挙すれば次の如くである。

(ティーカー)

(シャム本)

1 部第 1 章

第 1 章

1. Nāmapaṅṭhā

1. Nāmapaṅṭhā

2. Satiavassika-

2. Vassa-

3. Vimamsana-

3. Therassa tikka-paṅṭhā-

4. Anantakāya-

4. Antakāya-

5. Pabbajjā-

5. Pabbajjī-

6. Paṅṭhā-

6. Paṅṭhā-

7. Manasikāra-

7. Manasikāra-

8. Manasikāralakkhaṅṭhā-

8. Manasikāralakkhaṅṭhā-

9. Silapatitthanalakkhaṅṭhā-

9. Silapatitthanalakkhaṅṭhā-

10. Saddhālakkaṅṭhā-

10. Saddhālakkaṅṭhā-

11. Viriyalakkaṅṭhā-

11. Viriyalakkaṅṭhā-

12. Satilakkhaṅṭhā-

12. Satilakkhaṅṭhā-

13. Samādhilakkhaṅṭhā-

13. Samādhilakkhaṅṭhā-

14. Paṅṭhā-

14. Paṅṭhā-

15. Nānā-ekakiccakaraṅṭhā-

15. Nānā-ekakiccakaraṅṭhā-

第 2 章

第 2 章

1. Dhammasantati-

1. Dhammasantati-

2. Na paṅṭhā-jānana-

2. Nappaṅṭhā-jānana-

3. Paññānirujjhana—	3. Paññānirujjhana—
4. Parinibbāna—	4. Parinibbāna—
5. Sukhavedanā—	5. Sukhavedanā—
6. Nāmarūpapaṭisandahana—	6. Nāmarūpa—paṭisandhigahaṇa—
7. Punapaṭisanda[ha]na—	7. Punapaṭisandhigahaṇa—
8. Nāmarūpa—	8. Nāmorūpa—
9. Addhā—	9. Dīghamaddhāna—
2部第3章	第3章
1. Addhāmūla—pucchana—	1. Addhāna—
2. Pubbākoti na paññāyana—	2. Purimakoti—
3. Kotiva[d]dhana—	3. Kotiyā purima—
4. Atthi keci saṅkhārā— <sup>Ⓐ</sup>	4. Saṅkhārānaṃ jāyana—
5. Bhavantajāyana—	5. Bhavantānaṃ saṅkhārānaṃ jāyana—
6. Vedagū—	6. Vedagū—
7. Cakkhuvīññādi—	7. Cakkhuvīññāna—manovīññāna—
8. Phussanalakkhaṇa—	8. Phassalakkhaṇa—
9. Vedanā[lakkhaṇa]—	9. Vedanālakkhaṇa—
10. Saññālakkhaṇa—	10. Saññālakkhaṇa—
11. Cetanālakkhaṇa—	11. Cetanālakkhaṇa—
12. Viññāṇalakkhaṇa—	12. Viññāṇalakkhaṇa—
13. Vitakkalakkhaṇa—	13. Vitakkalakkhaṇa—
14. Vicāralakkhaṇa—	14. Vicāralakkhaṇa—
(章外)	
1. Vibbajj—	
2. Loṇa—	
3部第4章	第4章
1. Nānākammanibbattāyatana—	1. Manasikāralakkhaṇa—
2. Manussanānābhāva—	2. Ekabhāgata—

- |                                     |   |
|-------------------------------------|---|
| 3. Paṭi[gacca]kiccakaraṇa—          | 3. Pañcāyatana—kammanibba-<br>tta—        |
| 4. Na vilīya—                       | 4. Kammanānākarāṇa—                       |
| 5. Ākāsa—udaka—paṭhavidhā-<br>raṇa— | 5. Paṭikacceva vāyāma—karāṇa—             |
| 6. Nirodha—nibbāna—                 | 6. Pakatiaggito nerayaggīnaṃ<br>unhākāra— |
| 7. Nibbānalabhana—                  | 7. Paṭhavisaṅṭhānaka—                     |
| 8. Nibbānajānana—                   | 8. Nirodhamibbāna—                        |
|                                     | 9. Nibbānalabhana—                        |
|                                     | 10. Nibbānasukhabhāva—jānana—             |
| 第5章                                 | 第5章                                       |
| 1. Natthi Buddha—                   | 1. Buddha—atthinatthibhāva—               |
| 2. Buddhānuttara—                   | 2. Buddhānuttārabhāva—                    |
| 3. Sakkā Buddhānutara—              | 3. Buddhānuttarabhāva—jānana—             |
| 4. Dhammadittha—                    | 4. Dhammadittha—                          |
| 5. Na ca saṅkamati—                 | 5. Na ca saṅkamati paṭisandhi-<br>gahaṇa— |
| 6. Puggalavedagū—                   | 6. Vedagū—                                |
| 7. Kāya—                            | 7. Imamhā kāyā aññaṃ kāyaṃ<br>saṅkamana—  |
| 8. Kuhū ti—                         | 8. Kammaphala—atthibhāva—                 |
| 9. Uppajjati—jānāti—                | 9. Uppajjana—jānana—                      |
| 10. Atthi Buddha—                   | 10. Buddhanidassana—                      |
| 第6章                                 | 第6章                                       |
| 1. Kāya—ap[pi]ya—                   | 1. Kāya—appiya—                           |
| 2. Sampattakāla—                    | 2. Sampattakāla—                          |
| 3. Dvatimsu(a)purisalakkhaṇa—       | 3. Dvatimsa—mahāpurisalakk-<br>hana—      |

- |                        |  |
|------------------------|--|
| 4. 欠㊦                  | 4. Brahmacāri-                             |
| 5. Brahmacāri-         | 5. Upasampanna-                            |
| 6. Assu-               | 6. Assu-                                   |
| 7. Rasapaṭisaṃvedi-    | 7. Rasapaṭisaṃvedi-                        |
| 8. Paññā-              | 8. Paññāya patitthāna-                     |
| 9. Samsāra-            | 9. Samsāra-                                |
| 10. Sati-              | 10. Cirakatasaraṇa-                        |
| 11. Sati-abhijānana-   | 11. Sati-abhijānana-                       |
| 第7章                    | 第7章  |
| 1. Sati-ākāra-         | 1. Sati-ākāra-                             |
| 2. Vassasata-          | 2. Vassasata-                              |
| 3. Anāgata-            | 3. Anāgata-                                |
| 4. Dūrabrahmaloka-     | 4. Dūra-brahmaloka-                        |
| 5. BrahmaloKa-Kasmīra- | 5. BrahmaloKa-Kasmīranagara-               |
| 6. Sattabojjhaṅga-     | 6. Paralokagata-nīlapītādi-va-<br>ṇṇagata- |
| 7. Puñña-bahutara-     | 7. Mātukucchi-paṭisandhi-                  |
| 8. Jāna-ajāna-         | 8. Sattabojjhaṅga-                         |
| 9. Uttarakuru-         | 9. Pāpapuñña-bahutara-                     |
| 10. Dīgha-atthika-     | 10. Jāna-ajāna-                            |
| 11. Assāsapassāsa-     | 11. Uttarakuru-                            |
| 12. Samudda-           | 12. Dīgha-atthika-                         |
| 13. Ekarasa-           | 13. Assāsapassāsa-                         |
| 14. Chedana-           | 14. Samudda-                               |
| 15. Bhūtajīva-         | 15. Sukhuma-chedana-                       |
| 16. Dukkara-           | 16. Paññāvisesa-                           |
|                        | 17. Viññāṇādīnaṃ nānathabhāva-             |
|                        | 18. Arūpavavatthabhāva-dukkara-            |
|                        | 別問㊦  |

4 部第 1 章④

(難問)

1. Pūjāvajjhāvajjha—
2. Sabbaññū—
3. Devadatta—pabbajjana—
4. Paṭhavikampanahetu—
5. Sivirāja—dibbacakkhu—
6. Gabbhāvakkhanti—
7. Vassasatappamāna—
8. Sabba—akusalajjhāpana—
9. Paṭisallāna—
10. Iddhibalakittana—

第 2 章

1. Khuddānukhuddasamūha—
2. Mālukyaputta—
3. Sabbe tasa—
4. Parittānurakkaṇa—
5. Pañcasālagāma—
6. Pāpa—ajānana—
7. Ganapariharaṇa—

1. Gotamivatthadāna—

第 1 章

1. Tathāgatassa parinibbutassa asādiyantassa vañjhāvāñjha—
2. Buddhassa bhagavato sabbaññubhāva—
3. Bhagavatā mahākaruṇāya sabbaññutaññaṇena Devadatta—pabbājita—
4. Atthahetu—atthapaccayā mahābhūmicāla—pātubhāva—
5. Sivirañño cakkhudāna—
6. Gabbhāvakkanti—
7. Saddhamantaradhāna—
8. Bhagavato niravasena akusalamchetvā sabbaññutaṃ patta—
9. Tathāgatassa uttarikaraṇīyābhāva—

10. Iddhipādabala—dassana—

第 2 章

1. Khuddānukhuddaka—
2. Ṭhapanīyābyākaraṇa—
3. Sattānaṃ maccuno bhāyana—
4. Maccupāsā muttika—
5. Bhagavato lābhantarāya—
6. Tathāgatassa sabbasattānaṃ hitacaraṇa—
7. Setṭhadhamma—

8. Abhejjaparisa—

第 3 章

1. Puthujjana—

2. Mukhalohita—paggharaṇa—

3. Guhyapakāsana—

4. Moghapurisavacana—

5. Rukkha—acetana—

6. Dvipiṇḍapātasamaphala—

7. Buddhapūjā—

8. Apāsāṇāpapaṭika—

9. Khīṇāsava—

10. Ubbillāvita—

11. Niggaha—

12. Paṇāmana—

第 4 章

1. Moggallānanibbāna—

2. Pāṭimokkhapihita—

3. Musāvādatara—

4. Kulavilokiya—

5. Atthī nipātana—

8. Tathāgatassa abhejjaparisa—

9. Ajānantassa pāpakaraṇa up-  
panna—

10. Bhagavato bhikkhugaṇa pek-  
khabhāva—

第 3 章

1. Vatthaguyha—nidassana—

2. Tathāgatassa—pharusavācā  
natthīti pañha

3. Rukkhaṇaṃ acetana—

4. Dvinnam piṇḍapātanaṃ  
mahāpphalabhāva—

5. Buddhapūjānuññāta—

6. Bhagavato pādapappaṭikapa-  
tita—

7. Gāthābhigīta—bhojana—dāna-  
kathāya kathena—

8. Bhagavato dhammedesaṇāya  
apossukkabhāva—

9. Buddhassa ācariyanācariya—

10. Aggānaggasamaṇa—

第 4 章

1. Vaṇṇabhaṇana—

2. Ahimsāniggaha—

3. Bhikkhupaṇāma—

4. Buddhasabbaññū—

5. Aniketānālayakaraṇa—



6. Suvannaṣāmaṃmettāvihāra-
7. Bodhisatta-adhikasama-
8. Amarādevīnimantana-
9. Arahantasabhāyana-
10. Sākya-upamāharaṇa-

第5章

1. Aniketa-
2. Udarasamyata-
3. Anuttarabhisakka-
4. Anuppannamaggauppāda-
5. Lomakassapa-
6. Jotipāla-chaddanta-
7. Kassapabuddhakūṭikā-ovassana-
8. Brāhmaṇarāja-
9. Gāthābhigīta-
10. No dhammaḍesana-cittana-

第6章

1. Na me ācariyo atthi-
2. Dvibuddha-uppajjana-
3. Gotamidinnavattha-
4. Pabbajjānirattha-
5. Dukkarakiriyāniratthaka-
6. Hīnāyāvattanadosa-
7. Arahattakāyikadukkhavedanā-
8. Pārājika-ajjhāpanna-

6. Udarasamyama-
7. Dhammavinayaṭṭicchanna-
8. Musāvādagarulahabhāva-
9. Anuttarabhisakka-

第5章

1. Iddhiyā kammavipāka-balavata-
2. Bodhisattassa-dhammatā
3. Āttanipātana-
4. Mettānisamsa-
5. Kusalākusalasamasama-
6. Amarādevī-
7. Khīṇāsavānaṃ abhāyana-
8. Santhava-
9. Bhagavato appābādha
10. Anuppannassa maggassa up-

第6章

1. Paṭipadādosā-
2. Nippapañca-
3. Gihi-arahatta-
4. Lomasakassapa-
5. Chaddanta-Jotipāla-ārabbha-
6. Ghaṭikāra-
7. Bhagavato rāja-
8. Dvinnam Buddhānaṃ loke'

9. Pabbajitagihidussīla—

10. Udaḁajīvana—

第 7 章

1. Nippapañca—

2. Gīhīrahanta—

3. Arahantasatisammosa—

4. Tīṇi natthi—

5. Akammaja—

6. Kammaja—

7. Yakkhakuṇapa—

8. 欠

9. Anāgatesu paññattisikkhā—

10. Suriyatapana—

第 8 章

1. Vessantaraputtadāradāna—

2. Dukkarakārī—

3. Pāpabalava—

4. Petapāpuṇakapuñña—

5. Supina—

6. Akāraṇamarāṇa—

7. Parinibbutapīṭhīriya—

8. Ūnasattavassa—

9. Sukhadukkhamiṣṣanibbāna—

10. Nibbāna—anupavīṭṭhagaṇa—

nuppāda—

9. Gīhīpabbajita—sammāpaṭipatti—

第 7 章

1. Hīnāyāvattana—

2. Arahato kāyika—cetasika—vedanā—

3. Gīhīno pārājikajjhāpanassa abhisamayantarāyākara—

4. Samaṇadussīla—gīhidussīla—

5. Udaḁassa sattaḁjīva—

6. Loke natthibhāva—

7. Arahato satisammosa—

8. Nibbānassa atthibhāva—

9. Kammajākammaja—

第 8 章

1. Yakkhānaṃ maraṇabhāva—

2. Sikkhāpada—apaññāpana—

3. Suriyarogabhāva—

4. Suriyatappa—

5. Vessantara—

6. Dukkarakārika—

7. Kusalākusalānaṃ balavābalava—

8. Petānaṃ uddissaphala—

9. Kusalākusalānaṃ mahantāmahanta—

10. Suriya—

11. Nibbānasacchikaraṇa-

12. Nibbānagāmini-

(別章)

第9章

1. Anumāna-<sup>㉔</sup>

1. Kālākālarāṇa-

(第9章)

2. Parinibbutānaṃ cetiya pāṭi-  
hīra-

1. Dhutaṅgapañhakatthā

3. Ekaccārekaccānaṃ dhammāb-  
hisamaya-

4. Nibbānassa dukkhamis-  
sabhāva-

5. Nibbāna-

6. Nibbānasacchikaraṇa-

7. Nibbānassa paṭṭhāna-

8. Anumāna-

9. Dhutaṅga-

6部(譬喩問)

(譬喩問)

mātikāの数を示すのみ

7つの章名を示すのみで

問名はない

註<sup>㉔</sup>Miln T (p.13) では Atthi keci sañjānanapañho とあるが、Miln (p.52) には Atthi keci sañkhārā という1文があって、内容からみても、後者の方が問名にふさわしい。

㉔ 内容的には次の第5 Brahmācāripañhaと同じであるが、第4としての問名は欠けている。

㉔ ティーカーで言えば、難問第6章第3問に相当する。シャム本はこの問を別出したのである。

㉔ 難問第1章となるべきところであるが、ティーカーは前章からの続きとみて、第8章としている (Miln. T. p.27) が、次章以下は第2章から始まっているので、やはりここは第1章とすべきであろう。

㉔ ティーカーはこの問を第11 [問] としているが (Miln. T. p.39)、何かの問

違いであろう。

中村・早島訳「ミリンダ王の問い I」（東洋文庫 7 pp.177～179, p.250）でも各 1 問とされている。

12. Miln. T p.14.

13. cf. M. Winternitz: Geschichte der indischen Literatur II, p.144.

14. 内容的にみても、この問はそれまでの問を総括するようなものになっているので、後に新たに作られたとも考えられるのである。

15. SBE. p.I, p.99, n.1.

16. Louis Finot: Les Questions de Milinda, intro.p.11.

17. 前掲書86頁。

18. Miln. T pp.19–20.

19. Op. cit. p.40.

20. Ibid.

21. 漢訳『那先比丘経』における問数については、正確には数えられないが、水野博士の研究に従えば、73問程度数えられる。但し第 1 部から第 3 部までに対応する漢訳における問数である（水野弘元『ミリンダ問経類について』駒沢大学研究紀要第17号23頁以下）。

22. Miln. preface, pp.V–VI.

23. Miln. p.419にもその痕跡をとどめている。即ち、「譬喩問」第 7 章の第 7 番目の問の末尾に、「第 5 の射手の間」とあるのがそれである。順序通りならば、第 7 にあたるところである。